開 催 趣 旨

近年、保存科学研究集会では金属製品や木製品などの遺物保存に関する研究、あるいは同位体比分析やイメージング技術といった分析手法に関する研究をテーマとして取り上げて参りました。これらのテーマと並んで奈良文化財研究所にとって重要な研究テーマとなるものが、古墳、摩崖仏や土遺構などの遺跡の保存です。これらは主に石や土壌などの材料で構成されておりますが、一口に石や土壌といっても、例えば水の流れやすさなど遺跡の劣化に対して影響をおよぼす性質が遺跡ごとに大きく異なります。また、遺跡は現地で保存されることが原則ですので、周辺の環境条件もやはり遺跡ごとに大きく異なっており、画一的な保存方法というものを提示することは極めて困難といえます。そのため、遺跡の保存では、遺跡ごとに周辺の微気象や周辺地盤の水分状態など、環境条件に関するデータを取得するとともに、その環境の中で遺跡にどのような劣化の発生・進行が想定され、それらの劣化を抑制する保存処理ならびに環境調整法とはどのようなものか十分に検討する必要があります。

　また、近年、日本各地で頻発する豪雨災害や地震被害によって、遺跡もまた大きな被害を受けています。たとえば熊本地震によって多数の古墳で石室石材が崩落する、あるいは墳丘に大きなクラックが発生するなどの深刻な被害が発生しており、現在もその復旧方法が検討されています。このように遺跡保存においては、日常の維持管理方法だけではなく、突発的に起こる自然災害へのリスクマネジメントも近年ますます重要な課題となってきております。

　このような課題に対して、奈良文化財研究所では建築環境工学や地盤工学の専門の方々と連携して研究を進めております。とりわけ、日本建築学会では学会傘下の湿気小委員会内部に“文化財の保存と活用のための熱湿気環境解の検討WG”が設置され、文化財の保存を研究対象としている建築環境工学と文化財保存の専門家が、屋外に位置する遺跡から博物館の展示環境に至るまで共同で視察をおこない、文化財の劣化進行を抑制する環境について議論を重ねて参りました。そこで、今回の保存科学研究集会は日本建築学会、文化財の保存と活用のための熱湿気環境解の検討WGの委員の方々に、遺跡保存に係る研究についてご講演頂くことと致しました。この研究集会が、遺跡保存研究のさらなる発展の一助となれば幸いです。

奈良文化財研究所　保存修復科学研究室長

脇谷草一郎